

ネパールの教育・保育の現状と課題

——カースト制度、女性差別、貧困とたたかうネパール民衆——

山田 隆 幸

はじめに

一度はヒマラヤを見、雄大な自然の懐に入り込んでみたい、あるいは世界の最貧国の1つと言われる国でのボランティア活動で、自分が生きていることの手応えをつかんでみたいなど様々な思いで、ネパールという国に親しみを持っている日本人は多い。私が初めてネパールを訪問したのは、1992年である。富士山より高いところに登りたい、やがてヒマラヤの6000m峰に到達するというのが目標になった。当時、小・中学校の教員をしていた関係で、単に登山を楽しむだけでなく、ネパールの学校を訪れたり、子どもたちの生活・教育に目を向ける中で、様々な問題が見えてきた。いつも同行する妻は、無類の好奇心のかたまりで、飛び入りで授業をしたり、質問を連発して関わりを作り、私は、もっぱらその様子をビデオやカメラで記録をしてきた。

王制打倒を掲げる武装集団・マオイスト（毛沢東主義派）の勢力拡大を直接目にし、さらに一気に広がった第2次民主化闘争の進展を目の当たりにして、ネパール王国体制への疑問、子ども・教育に関する調査・研究意欲が高まってきた。2004年に義務制学校を定年退職、大学勤務になったことで研究時間が取りやすくなり、取りかかってみた。しかし、ネパールに関する研究・報告は膨大であり、今更どんなことをやればいいのか、取り組む意味はあるのか自信喪失であったが、目にするものの多くは、教育制度の研究や、援助活動の紹介・成果報告であった。カーストという差別制度による貧困のなかで喜び、悲しみ、必死に希望を追い求めて生きている民衆の姿を事例研究的に取り上げれば、それはそれで意味あるものになるのではと考えるようになった。さらに本学園には何人ものネパール人留学生がおり、彼らの受けた保育・教育の様子を聞くことで、私の個人的体験という枠から出られるという幸運も後押しとなった。今のネパールは、国家体制の激変期・不安定期であり、文章化されたものは、すでに過去のものとなっていることも少なくない。そのため、現地新聞やネットからの情報、現地で支援活動をしている日本人の報告や留学生の体験、私の足でつかんだ資料をもとに、今を生き抜いている民衆の姿を描くことになる。客観性、科学性に疑問を持たれることを覚悟の上で論述する。

また、ネパールの教育を考えるとということは、日本の教育・保育を見つめ直すことであると感じている。その一端を本学の「子ども学研究論集」2号(2010年)で、ネパールの幼稚園の早期教育について触れながら「幼保・小の連携の」あり方について」という小論としてまとめた。本稿でもあらためて幼児期の早期教育、格差・貧困の問題の中にあるネパールの子どもと日本の子どもの姿を重ね合わせながら考えていきたい。

第1章 ネパールの教育を見る三つの視点

ネパールの子ども・教育の課題を考えるとき、以下の三つの視点が重要であるとする。

- ①多民族・多言語のモザイク国家であり、それがカースト制度と結びつけられ、民族間に教育だけでなく、生活全般にわたるすさまじい差別と格差があること
- ②高校卒業時に全国一斉の卒業認定試験 SLC (School Leaving Certificate) があり、この成績が進路に決定的な影響を与える。このため、幼稚園、小学校、中学校、高校が暗記中心の SLC 対策の予備校化していること。
- ③支配体勢維持の中心システム・カースト制度を温存するために女性差別が甚だしいこと。

これらの視点を欠いたネパールの子ども・教育研究は、上位カースト社会を語ることにしかならないと考える。まず、ネパールを理解するために「多民族国家」、「カースト制度」「SLC」「女性差別」を概観する。

1 多民族・多言語のモザイク国家

ネパールでは様々な顔つきの人に会おう。もともとネパールに住んでいた人々、チベット系、インド系、モンゴル系、ヨーロッパ系……。言葉も違い、ネパール語を習得しないと民族間の交流ができない。

ネパールのジャート(民族・カースト)

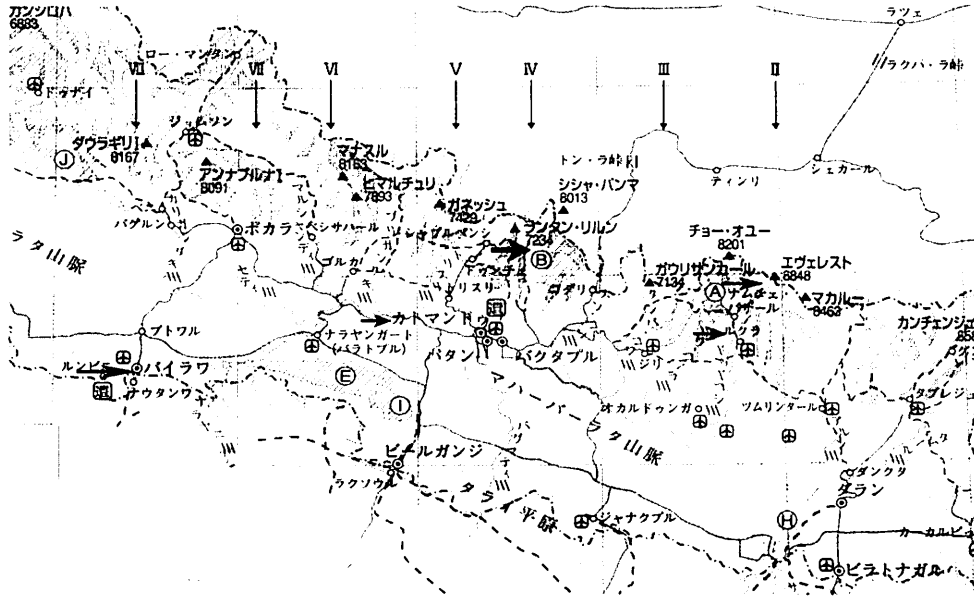
中 間 山 地 及 び	ブラーマン・チェット リ・職業カースト ネワール キランティ ライ リンプー	中間山地のほぼ全域にわたり居住。ネパール語を母語とする。 カトマンドゥ盆地を中心に分布。独自のカースト体系を持つ。 東ネパールに住むいくつかの民族の総称。 東ネパール、アルン川以西に住む。多くの部族に分かれる。 東ネパール、ライの東側に住む。多くの部族に分かれる。
----------------------------	---	--

ネパールの教育・保育の現状と課題

盆地に住む人々	タマン マガル スンワルとジレル グルン タカリー パンチガオレン チェパン ラウテ	主にカトマンドゥ盆地をとりまく高い山地に住む。 中央ネパール、ガンダキ水系一帯に住む。グルカ兵を輩出した。 東ネパール、ライの西側に住む。 中央ネパール、マガルの北側に住む。グルカ兵を輩出した。 中央ネパール、カリ・ガンダキ川流域に住む。商業民。 中央ネパール、タカリーのすぐ北側に住む。 中央ネパール、タマンの南側に住む。 西ネパールに住む。採集狩猟民。
タライに住む人々	ブラーマン・チェットリ ・職業カースト タルー ダヌワール、マジ、ダライ ラジバンシ サタールタライ ディマール、ボド ダンガル ムサルマン	タライ全域に居住。ヒンディー語系の諸言語を母語とする。 中部、西部を中心にタライ全域に住む。タライ最大の民族集団。 タライ東部から中部に住む。 タライ東部に住む。 インドのサンタールと同一民族とされる。東部に住む。 タライ東部に住む。サタール、ラジバンシ、タルーと近接。 タライ東部、ディマールなどより西側に住む。 ムスリム。ネパール各地に散在する。
ヒマラヤ山地の人々	シェルパ ロミ ツダムとトプケ・ゴーラ の人びと オランチュンの人びと ムスタンのローパ バーラガオンレ ドルポの人びと マナンパ※ ラルケとシアールの人々	東ネパール、ライの北側に住む。 東ネパール、シェルパの東側に住む。 東ネパール、ロミの東側に住む。 東ネパール、ツダムの東、リンブーの北側に住む。 中央ネパール、カリ・ガンダキ川上流域に住む。 中央ネパール、ローパとパンチガオンレ、タカリーの間に住む。 中央ネパール、タカリーなどの西側、ダウラギリの北側に住む。 中央ネパール、タカリーなどの東側、アンナプルナの北側に住む。 ※一般に「マナンギ」や「ニシャンバ」と呼ばれる。 マナンの東の二つの谷筋に住む。

アジア読本「ネパール」石井溥編 p.48より

北のヒマラヤ地域にはチベット系、南部のタライ地域にはマガル、ライ、リンブー、グルン、タマン系、中間山地にはブラーマン、チェットリなどネパール語を母語とする人々が住む。つまり居住しやすい地域に上位カーストの民族が住み、彼らの言語を「国語」とし、学校で、それをネパール語とし、英語を第2国語的に教えている。



→は、本稿で取り扱う地域

母語人口と10年間の推移

言語名	母語人口 1981年 (人)	母語人口 1991年 (人)	対人口比 (%)
ネパール語	8,767,361	9,302,880	50.31
マイティリ語	1,668,309	2,191,900	11.85
ボジプリ語	1,142,805	1,379,717	7.46
タマン語	522,416	904,456	4.89
アワディ語	234,343	374,638	2.03
タルー語	545,685	993,388	5.37
ネワール語	448,746	690,007	3.73
マガル語	212,681	430,264	2.33
ライ話語	221,353	439,312	2.38
グルン語	174,464	227,918	1.23
リンブー語	129,234	254,022	1.37
ボテ・シェルパ語	73,589	121,819	0.66
ラジバンシ語	59,383	85,558	0.46
サタール語	22,403	25,302	0.14
ダヌワル語	13,522	23,721	0.13
スヌワール語	10,650	—	—
チェパン語	—	25,097	0.14

ネパールの教育・保育の現状と課題

タミ語	—	14, 400	0. 08
タカリー語	5, 289	7, 113	0. 04
ジレル語	—	4, 229	0. 02
レプチャ語	—	—	—
その他	770, 606	995, 356	5.38
総人口	15, 022, 839	18, 491, 097	100. 00

*アジア読本 ネパール 石井 溥 編 p 28 1997年 河出書房新社をもとに作成

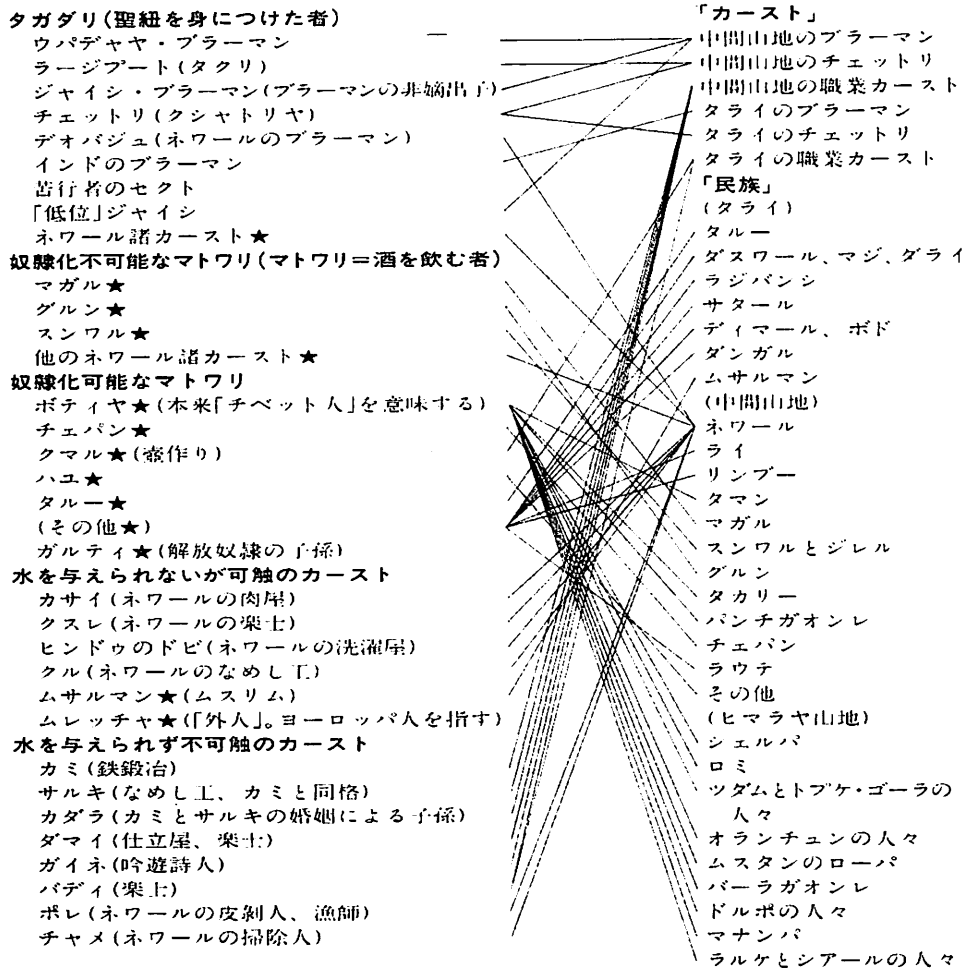
2 カースト制度 (ジャート)

ネパール語の「ジャート」は、「民族」と「カースト」、両方の意味を持つ。日本語では全く意味が異なるのにネパール語では同じ「ジャート」が用いられる。つまり民族とカーストは分かちがたいのである。ネパール語を母語とするヒンドゥー系の高カーストの支配層が、本来はカースト制度を持たなかったチベット系、ビルマ系の民族をも組み込んでしまった結果である。これ以降、本稿では、差別制度に限定する場合はカースト、それ以外は「ジャート」という用語を用いることとする。

民族と身分の関係を理解するために、アジア読本「ネパール」 石井溥編 p.49 所収の図が参考になる。左の分類が、現憲法で否定されているにもかかわらず、今でも事実上生き続けている「ムルキ・アイン法(1854年制定)」によるジャートである。ヒンズー教の持ち込んだカーストの基本的考えは、「けがれ」であり、「浄カースト」と呼ばれる上位のグループ「タガタリ」「マトワリ」と、「不浄カースト」と呼ばれる下層の「ダリット(差別撤廃運動に取り組んでいる人たちが積極的に使い始めた)」の三つに分けられる。ただし下層のダリットも「不浄であるが接触しても清める必要のない階層」と「不浄であり、接触したら聖水で清める必要のある最下層」に分け、四つのジャートとすることもある。ネパールの研究者間ですら統一した考えが持てないほど複雑である。

ジャートは、寒帯から亜熱帯までの気候帯を持つため、くらしやすさに大きな差のある居住地域を固定化する。さらに職業を固定化し、このため社会的、経済的地位が固定化され、生活の隅々にまで、信じがたい差別・格差を生んでいる。

一例を挙げると最下層の「不浄グループ」は、上位カーストの家の中には入れてもらえない。飲み物を与えられるときは、離れたところで地面に置かれたものを手に取らなければならない。決して直接手渡されることはない。したがって私たちがネパールを訪れても最下層の人たちと直接に接触する場面はまず無い。



引用：アジア説本「ネパール」 石井博編 p.49

3 女性差別

女性差別の典型は、何よりも「女には学問はいらない」という考えが根強いことである。日本の封建時代の男尊女卑の考え方がいまだに支配している。典型は、女性を教育から排除していることである。さらに、一夫多妻制度が容認されているし、離婚(夫が勝手に家を出て行ってしまうケースも含めて)すれば、まともな勤め先は見つからず、即、貧困を意味する。冠婚葬祭時、実家に顔を出そうものなら歓迎されざる客扱いとなる。夫に先立たれば、そのまま婚家に残ることになり、まさに「未亡人(未だ亡くなっていない人)」となる。義父などに理解があれば再婚も不可能ではないが、服装は地味な色、普通は、多くの装身具をつけるののだがそれも許されず、一目で喪に服している貞淑な妻を演じなければならない。演じるというより当然のこととして受け止められている。近年、ネパールの民主化運動とともに、女性解放運動が前進し始めている。

参考：留学生 Tabika の調査「結婚と女性の地位(ジェンダー問題)」より

第2章 ネパールの教育制度

－留学生 Tabika（仮名）の受けた教育を例に－

彼女のジャート(民族・カースト)は、中央ネパールのバイラワに住む上位ジャート、「マガル」である。浄カースト(中以上のジャート)の教育を受けてきており、ネパールの教育制度を理解するモデルと考えられる。

1 就学前教育

(1) Tabika の幼児期

幼稚園・保育園という施設は、カトマンズに集中し、大都市以外はほとんど無い。Tabika は、そのため経済的には可能であったが、就園できなかった。祖父母が早く亡くなったため、母の手だけで厳しく育てられた。父は優しくしたが自営業で忙しく、たまに接してくれるときは、とても優しくったという。女兒は外で遊ぶことは許されず、母親のそばで家事を手伝うなど、まさに「良妻賢母」となる「躰け教育」を受けた。「男は自由に外で遊んだりできたのに」と不満そうな口ぶりであった。Tabika が研究室に現れるときの謙虚さ、さりげなく乱雑な研究室を片付ける様子などからも母親のしつけの影響がうかがわれる。

一方、同世代でもカトマンズに居住する富裕層の子たちは、3歳から私立幼稚園に通い、公立小学校低学年以上のレベルの教科教育を受けている(後述)。

政府は、地域共同体での保育目標・方針を立ててはいるが、現段階では、幼児期からの教育格差・男女差別が温存されている。

(2) 混迷する政治により進まぬ「幼年期発達プログラム (Early Childhood Development Program・略称 ECDP)」

王政が廃止され、国の民主化が進むと期待されたネパール。依然として政府と武装闘争派、政党間の対立が続いている。国連監視団の力で内戦は押さえられているが、教育・保育の改革プログラムはなかなか進まない。

2010年7月まで名古屋大学・中部大学に留学し、帰国後も保育の研究を続けている Sobita Koirala 氏が現地から送ってくる研究レポートは、学ぶことが多い。その研究報告をもとに、Tabika からの聞き取り調査、私の調査をもとに論述したい。ネパールに在住する日本人が現地新聞などをもとにインターネット新聞も情報をもたらしてくれる。これも鶴呑みにすることは危険であるが、混迷する今のネパール社会を知るための貴重な資料と考えている。

結論から言うと、日本で考えられるような「幼児教育」は、プラン止まりである。幼児教育の施設そのものが首都カトマンズに集中し、山間部はもとより、地方都市にもほとんどない。

国連関連機関では、開発途上国での Early Childhood Development (以下、ECD) を優先課題に挙げ、子どもの権利を擁護するユニセフは、1998年以降、優先課題を ECD としている。ECD は、「最も恵まれない子どもたち」を中心に Early Childhood Care and Education(以下、ECCE)

プログラムを行うこととしている。これを受け、政府は、ユネスコや各国の援助のもと、10次5カ年開発計画を持ち、2015年までに幼児教育就学率80%という目標を立てている。幼児教育という言葉は87年の7次計画から出ているが、「家族、家庭やコミュニティで幼児教育をやらなければいけない」と述べているだけで、公的施設での具体的な施策はなかった。9次計画になって初めて、具体的計画が出はじめ、10年次計画では以下のようにになっている。

- ①10次計画で2007年までに1万3000のECDセンターを作る。
- ②幼児教育者、ファシリテーターの訓練をする。ファシリテーターというのは、プロジェクトの推進者・まとめ役であるが、責任者というほどの地位にはない。
- ③小学校の先生あるいは学校長に幼児教育の重要性を教え、また両親にも幼児教育関係のプログラムを用意する。

この計画では、幼児教育関係事業に26万6000人の人たちを参加させることとなっているが、憲法制定さえ進まず、小学校の就学率もなかなか上がらぬ中、計画は止まっている。

(3)二つの幼児教育

政府の計画では、**幼年期ケア(Early Childhood Care、略称 ECC)**と**就学前教育(Early Childhood Education、略称 ECE)**の二つに区分されている。

幼年期ケアプログラム・ECCは、3歳未満の乳児のためであり、デイケアセンター、チャイルドケアセンターなどと言われる。

就学前教育プログラム・ECEは、3歳から5歳まで(小学校就学前)の子どもたちに受けさせる教育と言える。ECEプログラムは、

- ①学校主体の幼年期プログラム(School-Based Early Childhood Development Program)、
 - ②地域共同体主体の幼年期プログラム(Community-Based Early Childhood Development Program)
- の二つの形態が考えられているが、どちらも普及率はきわめて低い。保育現場では、幼年期に対する「ケア・ECC」と「教育・ECE」が明確には分けられていない。

【学校主体の幼年期発達プログラム】

学校主体の就学前プログラムは、3歳～5歳の子どもたちを対象とし、子どもの豊かな発達と初等教育の準備をするという理念が掲げられている。都市部では、ECEプログラムは、初等教育の学校施設において行われており、就学前教育及び幼稚園(Kindergarten)という用語を使用している。Nursery(年少)、LKG(年中)、UKG(年長)の三つのクラスに分かれて、三年制で行われている。このECEプログラムは、理念とかけ離れ、父母のニーズもあり、SLC対策の早期教育、とりわけ英語教育に重点が置かれている。まさにPre-school and Pre-primary schools(就学前教育)である。卒業認定試験(SLC)を目標とした早期教育を行うpre-primary classという私立幼稚園(幼児教育

施設)が 84%近くを占め、それもカトマンズに集中している。幼稚園に行かず、いきなり公立小学校に入り、でその格差に苦しんだ Tabika は、幼稚園に行けなかったことが残念そうである。幼稚園は、授業料が高く、経済的にゆとりのない家庭の子どもや郡部で暮らしている住民の子どもたちにとっては、無縁の存在となっている。

【地域共同体の幼年期発達プログラム】

地域共同体の ECD プログラムは、子どもの全体発達を目的とし、子どもの精神的、社会的、情緒的発達を促す楽しい学習環境を整えることを理念としている。さらに実態に合わせて、4歳-5歳年齢の子どもたちには、就学準備のための教育を受けさせることができるとしている。

教職員のための研修を行い、教材だけは無償提供するものの、ECD センター設立後の責任はコミュニティへ移行し、教職員の給与、教材費、運営資金などはコミュニティが負担することになっていた。そのため、実施できる地域共同体は少ない。そこで国が教員の給料および ECD センターの支出金を 1/4 から 1/2 を負担することにしたが、それでも計画は進んでいない。

参考資料:「ECD、教育、教育政策、ネパール、ネパールの教育現状」 sobita koirala

<http://sobitakoiraal.blogspot.com/>

(4)カトマンズ市内の幼稚園

2009年5月、ガイドの Saroj Chitrakar 氏の案内で、カトマンズ市内の二つの幼稚園を訪問した。彼は、元保育士・教師で人脈を生かし、短期間に効率よく調査ができた。退職した理由はあまりの低賃金と身分の不安定さであり、日本語を身に付け、ガイドに転身した。良くあるケースである。

しかし、彼の努力にもかかわらず、突然、マオイスト(武装闘争派)の思想中心の教育を行ったという理由で解雇された教員の支援ストライキが勃発し、公立幼稚園は外からの施設見学、私立幼稚園は園長からの聞き取り調査だけとなった。ストライキどころかゼネストも日常茶飯事で、しばしば体験している。

【公立幼稚園】 ー小・中・高、同一校舎ー

設置・維持のコスト削減とか、様々な理由で、1階部分が幼稚園、2階が小学校、3階が中学校、最上階が高等学校となっている。幼稚園らしい雰囲気を出すため1階部分の壁や窓は絵や切り紙で飾られている。運動場などはむろん共有であるが、机・椅子なども構造は同じである。

小・中・高が同一敷地内にあるというのは、メリットもあるであろうが、SLC という受験制度が重しとなって、マイナスの作用を幼稚園に及ぼしていることが懸念される。保育内容を聞くことはできなかったが、掲示物や施設・設備の様子から、英語教育とか、小学校低学年の内容を薄めたようなものになっていることがうかがい知れた。



複合校舎



園児用昇降口



教室

保育士には SLC に合格していれば、特別の学習をしていなくても採用される。小学校教員も同様である。規定通りとすれば、16 歳でも保育士・教師になれることになる。保育士・教師としての専門的な訓練制度が進んでいないため、発達段階が理解できず、幼児教育と学校教育の違いと関連性を理解できないのは当然であろう。また保育士・教師としての訓練を受けても、山間部などは施設・設備のみならず待遇も悪いため、赴任したとらないという(後述するランタン小学校の項を参照)。

次に訪問した私立カトマンズ大学附属幼稚園の調査で、ECC プログラムでなく、年少組でも ECE プログラムで進められるのではないかという懸念はさらに強まった。

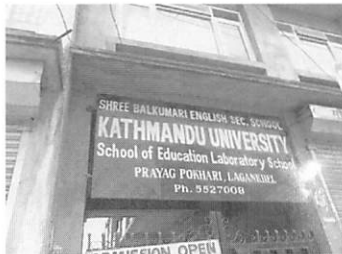
【 pre-primary class の教育】 -カトマンズ大学附属幼稚園-

ストライキのため、園児も保育士も誰もいない中、園長の Dil Deui Mulmi さんが対応してくれた。40 代後半の知的な女性である。

①施設

訪問したカトマンズ大学附属幼稚園・保育園は、マンションの2室と中庭を利用している。当然ながら狭く、日本であれば、無認可保育所あつかいである。鉄の扉を開け、狭い通路を歩いて2階に上がると、そこが幼稚園であった。椅子と机が一体化した小学校と同じような教室である。

背面には、ネパール語と英語の「50? 音表」が貼られている。積み木や古びた絵本がわずかあるだけである。園長は、「もっといろいろな玩具や教具をそろえたい」と語ったが、SLC 体制の中で、幼児教育の理念そのものが描ききれないようである。



園門



教室

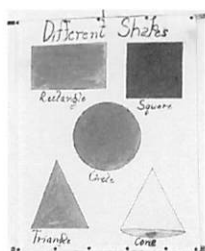


園庭

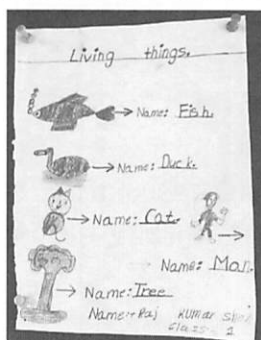
②保育目標

教員・園児には会えなかったが、週の時間表からその早期教育がうかがえる。年中・年長組は幼稚園であり、年少組は保育園となっている。しかし、年少組のカリキュラムは年中・年長組とあまり変わらず、時間数が減らされ、帰宅時間が1時間早くなる。

	1限	2限	3限	休み	4限	5限	昼食	6限	7限
時間	9:50～ 10:30	10:30～ 11:00	11:00～ 11:50	10分	12:00～ 12:40	12:40～ 13:20	13:20 14:00	14:00～ 14:40	14:40～ 15:20
年中組	国語Ⅰ	国語Ⅱ	算数Ⅰ		算数Ⅱ	科学／造形	弁当	英語Ⅰ	英語Ⅱ
年長組	算数	算数Ⅱ	英語Ⅰ		英語Ⅱ	科学／造形	弁当	国語Ⅰ	国語Ⅱ



算数は英語で



園児の英語作品



英語の積み木

英語は第2国語ともいえる。学校では、算数・理科(科学)などは英語で行われるので、幼児期から英単語など徹底的に注入される。

何よりもネパールの幼児教育に対する父母(富裕層)の要求もあり、園側の最大目標を示しているのは次の写真である。

ネパールでは、SLCに合格することが安定した収入を得られる仕事に就くための必須条件であり、その中核は英語力である。幼稚園段階で△、○、□などの図形は、英語で教えている。日本でも国際化が強調され、どんどん英語学習を導入する幼稚園が増えているが、ネパールの英語習



得の切実さとは比べ様も無い。

遊戯室兼お昼寝用の部屋には、SLCで最上位グレードを獲得した卒園児の顕彰板が飾られていた。

観光立国であるネパールでは、日常的に英語に接する機会が多い。私が高地の村の雑貨屋で買い物をしたとき、私の片言英語を小

学生の息子が通訳して親父に伝えてくれた。高校生になると欧米のツアー客と対等に話し合う。数学・科学などは英語で授業が行われているのであるから当然である。それに比べて、日常生活では切り離された日本で、幼児の英語教育を週に1時間程度やって身につくのか？私は否定的である。それよりも母語をしっかり身につけるのが大事ではないか。

ガイドの Saroj 氏は高校生の息子の教育でこう嘆いた。「英語が得意なので、全体としては良い成績を取る。しかし国語(ネパール語)が苦手なので、私が教えている。」

③教師の身分・待遇

この園の教員は、教員数 園長、国語、算数、英語担当各1人である。保育士に採用される条件は、SLCに合格することであり、日本のように保育士・幼稚園教諭の資格はない。幼稚園であるが、国語・算数・英語の教師として採用される。この園の元保育士であり、今回のガイド役である Saroj Chitrakar 氏は、「給料は、園児徒一人あたりの月謝と大して変わらなかった(1000ルピー)」と教えてくれた。いくら物価が安いとはいえ、これでは生活は苦しい。

2. 小・中・高等学校 SUNSHINE HIGHER SECONDARY SCHOOL

小(5年間)・中学校(3年間)・高校(2年間)

(1) 3つの言語習得のかべ

Tabika の入学した小学校は、中学・高等学校と同じ建物にある。小学校を終えても卒業式といった明確な区切りはなく、中学校の教室へ行くだけである。8年制と言える。高校は、希望者となるので、手続きなどが、はっきりしている。Tabika は、「学校では、かつてのアメリカのようなことはなく、さまざまなカーストの子と一緒に学んだ」と語る。しかし下校後や休日の生活で一緒に何かをするということは全くなかったし、そのことが差別という意識は全くなかったと言う。そもそも女の子が自由に外出することは禁じられていたのである。

教科学習は、国語・算数、社会科と理科が混ざり合ったような科学の時間（それが、環境教育のような意味を持っていた）である。大気汚染・水質汚濁・森林破壊・洪水などの基礎用語を学んだ。しかし言葉を教えるだけで日本の総合学習のように原因や解決法を考えることはなかった。

ジャートにより言葉が違うので、国語というのはネパール語である。ネパール語を母語としていないジャートの子は、3カ国語を習得しなければならず、このことが、低学力、落第、中退などの問題になっていく。

英語は、低学年から学ぶが、公立学校は、単語を覚える程度であり、教具もなく、教師の発音をオウム返しにしていただけである。どこの小学校でも単語カードの掲示がある。私立学校に通わないと英会話などを身に付ける事は難しい。」と言う。英会話を教える力量を持つ教師がきわめて少ないのである。日本でも小学校に「英語活動」の時間が導入され、外国人講師でカバーしている自治体はともかく、そうでないところは同じような困難をかえている。

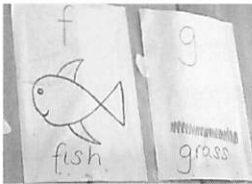


Tabika は、体罰を加えるとか、宿題をたくさん出す怖い先生がいたし、それがいやで学校に来なくなった子どもいたと語る。また公立学校は、給与などの待遇が劣悪なため、教師の質も低く、勝手に帰ってしまい、家で仕事をしていたり、休んだりする教員がいたと Tabika は批判する。子連れで勤務することが容認されていたり、子どもも学齢前の弟妹を連れて登校し、子守りをしながら勉強していたりする。

6歳から小学校入学であるが、経済的理由や親の考えで8歳、9歳で入学してくる児童もあり、日本では異年齢集団の活動をわざわざ計画したりするが、ネパールの公立学校では、落第もある。左の写真では、複式学級のように見えるがこれが1学年である。

こういうさまざまな困難を抱えているだけに、教員養成が大きな課題となり、ユネスコや外国の援助で訓練所はできつつある。しかし、決定的に不足している。

3500Mの高地にあるランタン小学校は2005年の第1回訪問時の校長は、軍隊出身。朝の全校



朝礼は軍隊の行動訓練そのもので、子どもたちはピリピリしていた。それでも登校の様子を見るといそいそと飛ぶようにやってくる。

ランタン小学校でも英単語の掲示があったが、英会話まで教えられる教師の確保が難しい。使っている教科書は何年も使い回している古びた物であった。たどたどしいネパール語で音読練習や計算練習に取りくんでいた。普段はシェルバ語を話しているので、国語の時間といってもネパール語なので外国語を学ぶようなものである。これに英語が加わるのであるから大変である。英語は先生の発音の口まねである。在校時間が決められているので、午後は遊び的な時間となる。伝承遊びをしたり、わらべ歌を歌ったりもし、それが体育とか音楽の時間と言える。

2008年の第2回の訪問時には、訓練を受けた校長が変わっていた。彼はサッカーの指導をしていた。ルールがあり、それに従って勝敗を争う、用具はボール一つで安上がりな上に運動量が多く、年齢を問わない等、長年サッカーの指導をしてきた私から見てもよい授業であった。しかし、この高地でサッカーなどを我々がしたら、高山病でダウンしてしまう。

さらに感動したのは、彼の潔癖さであった。見学・調査に入るときは、現地の雑貨屋で文房具や歯磨きを買ってお礼にしている。なぜ歯磨きかというところ「お菓子が増えたが、歯磨きの習慣がないため虫歯が増えている。歯磨き運動を支援してほしい」と前回の訪問時に求められたからである。



ところが今回は店が開いておらず、やむを得ず彼に現金を差し出し、「子どもたちに文具などを買ってやってほしい」と何度も頼んだが、「現金は、受け取れない」と拒み通した。

(2) 深刻な未就学・中退者の多さ



第2回訪問時の全校集会

問題は、就学率の低さ、中退率の高さである。奥地に行くほど、「女に学問はいらない」という考えの根深さに気づかされる。ランタン小は、19名が登校していた。うち女兒は4名であった。

また高学年の子が、ほとんどいない。貴重な労働力となるので、学校へ来なくなる。一応ネパール語の読み、書き、計算ができるようになればよしとされ、高学年の子は、大人同様の労働に従事

し、重い荷物を背中に担いだり、ゾッキョ（牛の1種）を引いて荷物運びなど力仕事をする。



ネパールで初めての学校給食風景

私の関係する NPO 法人・ネパール・ムスタン地域開発協力会は、4000M を超す奥地に小学校を建設したが、ネパールで初めて学校給食を実施することで、就学率が飛躍的に向上した。学校へ行くことで、食事が保証されるのである。学校建設が中心でなく、寒冷地なのでリンゴ栽培や畜産など自立できる農業技術の指導が中心であるが、学校・病院建設も重要な課題となっている。

この子たちは、SLC 制度からはじき飛ばされた存在である。このような状態は、王族や上位ジャーナが支配するのに好都合である。しかし新しく赴任してきた校長たちのような力を持った人々と諸外国の学校建設支援で、村人達の考えも変わって行くであろうことを予感させた。

3 SLC (School Leaving Certificate・卒業認定試験) の受験

Tabika は、小学校5年、中学3年、ハイスクール2年を順調に突破した。これで10年、SLCを受験することになる。合格者が、ハイアーセカンダリースクール2年に進学できる。ネパールの現在の教育制度では、小中高は10年間で修了してしまい、欧米水準の大学入学より2年早くなる。そこで「ハイアーセカンダリースクール」で+2という特別な教育制度を設けて12年間として、質を高めている。

全国各地の試験場で、2週間ほどかけて実施される。1日に1科目の時もあれば2科目の時もある。この間、受験生は徹夜状態になったりもすると言う。

正答率36%(Tabikaの説明。40%という説もある)が、最低合格ラインである。50%以上が第2グレード、60%以上を取れば、第1グレードとなる。合格するとハイアーセカンダリースクール入

学が許可される。ここを卒業すると大学入試が受験できる。

2010年のSLCは、全国で35万人近くが受験、ハイアーセカンダリーSLCは、12万人近くが受験した。ネパールの学校は、このSLCの合格率を高めること、より高いグレード合格者を出すことが最大目標である。それが、入学者の確保に直結する。Tabikaの話では、合格率100%としている学校は、出来ない生徒には、受験を翌年度に延ばすよう進めたりする。カトマンズでは、採点ミスで上位の成績を得られなかった17歳の女子学生が、自殺したニュースもあったという。幼児教育の段階でハンディのあるTabikaは高校で遅れを取り戻す努力をする。数学や科学の時間は英語で行われるので、英語には慣れて心配はなかったが、数学や科学の内容がわからない。そこで担当の教師に月謝を払って、学校が終わってから家庭教師をしてもらったという。今の日本では考えられないことである。こうして幼稚園に行けなかったハンディを乗り越え、最上位グレードでTabikaはSLCを突破した。

4 ハイアーセカンダリースクール (2年間) UNITED ACADEMY

Tabikaの選んだハイアーセカンダリースクールでは、科学コース(医師・高級技術者)、ビジネスコース、人間・環境コースに分かれる。Tabikaは、ネパールの開発に関心があり、ビジネスコースを選択した。しかし開発による自然破壊等に関心が向き、環境問題と開発のあり方を考えるようになった。

5 大学 NATIONAL COLLEGE CENTAER FOR DEVELOPMENT STUDEIS

ハイアーセカンダリー終了後、大学に進学。3年制の大学もあるが、Tabikaの選んだ大学は4年制で「社会学・環境・福祉」の3学部がある。Tabikaは、高校から関心のあった人間・環境コースを選択し、開発と環境保全、結婚と女性の地位(ジェンダー問題)について学んだ。環境問題の取り組みでは先進国である日本への留学を考え、日本語学校に通ったが、ネパール人教師の日本語は通用しないことが分かり、卒業後すぐ日本に渡り、日本語を学びなおした。

6 留学 名古屋産業大学

Tabikaは、日本に来て、日本語を1年半学び直した後、環境問題中核とする名古屋産業大学に入った。何人もの留学生は日本語の難しさで脱落するが、日本語をしっかり学んだTabikaは、帰国したら、環境問題に取り組んでいる外国人の組織しているNPOの事務所で働きたいと語っている。

第3章 不就学・中退のハンディを乗り越える

1 高地に住むシェルバ族のたたかい

母語人口121,819人、ネパールの総人口に対し0.66%でありながらネパールでもっとも知ら



【エベレスト街道に立ち並ぶ遭難死したシェルパの慰霊碑】

れているのがシェルパ族である。しかし、ジャートの位置としては中位、高地に住む少数民族で、独自の言語としてシェルパ語を持つ。居住地が寒冷な高地のため、本格的な農業は難しく、19世紀までは主に「放牧」や「他民族との交易」で生活していた。

しかし、高地に順応した体力を買われて欧米の登山隊の荷物運び（ポーター）として雇われるようになった。特に優秀な者は、イギリスがインドに作った登山学校で学び、登山技術を磨いた。彼らは、信頼できる案内人（ガイド）として雇われるようになり、エベレスト初登頂を始め、8000m 峰登頂を可能にした。彼ら無しではヒマラヤ登山は成立しない。

ガイドのチーフは「サーダー」と呼ばれ、登山の総指揮を執る。英語・フランス語・日本語などを自由に操る。2代目、3代目の息子たちを欧米に留学させ、外国語や欧米のマナー、ビジネスを身につけさせている例も珍しくない。日本の山小屋でアルバイトをしながら日本語や食事など日本人の好みなどを身につけたガイドも多い。妻にロッジ経営をさせ、自分自身も年を取るとオーナーとして働く。父親がエベレストに3度登頂したという Nabin(仮名)にガイドしてもらったが、彼はアメリカ留学中にビジネスの魅力にとりつかれ、父の後を継ぐことなく、アメリカでビジネスマンになっている。彼の父親も賛成している。

登山案内人の職はネパールの平均収入と比べて高収入で、この職を得る競争は激しい。しかし死の危険も大きく、多くのシェルパが登山中に命を落としている。エベレスト街道の途中に、ヒマラヤ登山で命を落としたシェルパの慰霊碑が累々と続いている。こういう犠牲の上に、シェルパ族は、ジャートとしては上位ではなくても、経済的に豊かな社会を形成し、国際的に高い地位を占めるようになった。

サーダーの大事な役目の一つは客の食事の管理である。注文を聞いてロッジに伝え、食事中も調味料とか様々なリクエストに応える。支払いも彼がきちんと済ませてくれる。体調が悪ければアドバイスもしてくれる。それだけにポーターからガイドになると収入が一気に増える。サーダーの宿泊費は無料である。どのロッジに泊まるかはサーダーに任せることが多い。ロッジ側にしてみれば客引きでもあるので大事にする。サーダーのもとに、見習いと言っても言うべきシェルパ族の若者がポーターとしてつくことがある。今は30kgまでと制限されているが、かつては成人で、50kg以上を担いでいた。さらに調理担当のキッチンボーイがつくが、15~6歳の若者が多い。ポーターやキッチンボーイにはタマン族が多い。彼らのジャートとしての位置は、シェルパ族とほ



ぼ同等である。しかし登山ガイドとしての力量が認められていないため、シェルパ族と比べると経済的には低い。重い荷物を担いで宿舎に着いて少し休憩すると、本を開いて勉強を始める。動物の名前とか家具の名前とか英単語の丸暗記なので、これでいいのか心配になる。学校へ行っていないのか、中途退学したのであろう。近年、日本語への関

心は高い。そこでメニューを教科書にして、日本人ツアー客の食事の注文の取り方や日本語の数字の読み方を教えた。疲れているであろうに驚くべき集中力で「じゅう、ひゃく・・・」と数字の読みに取り組んだ。

町のレストランでも、日本人とわかると「これは日本語で何というのか?」とボーイから聞かれることがしばしばある。SLC の様な受験体制からはじき飛ばされている少数民族で成功するために、こういう努力をしている。

Tabika は、上海などでビジネスマンとして成功し、ジャートの差別から脱けだした例を挙げた。

2 下層ジャートに未来は見えるか

— 「ネパール共産党毛沢東主義派 (マオイスト)」 はなぜ勢力を拡大したか—



正面にエベレストが見える 3867M の高地にタンボチェがある。1993 年、ここにテントを張った。売店があり 10 歳前後のかわいい二人の娘が店番をしていた。もちろん学校へは行っていない。20L も入るポリタンクを担いで水汲みをしたり、テント場の掃除をしたり、ロッジの仕事を手伝ったり大変な労働に従事していた。6 年後、再びここを訪れが、まだ二人は働いていた。すっかり娘になっていたが、表情は暗かった。妻が軽い気持ちで「結婚しないの?一緒に来たポーターさんなんかはどう?」話しかけた。即座に、「だめ!宗教が違うから」という返事が返ってきた。宗教の違いという言い方で、自分たちのジャートはもっと下だからということ伝えたのだ。身分の違いジャートと結婚すると、下のジャートに落とされる。家族つきあいは、一切絶たれてしまう。特に自分より下のジャートと結婚した場合の仕打ちは悲惨である。したがって下位のジャートと結婚する男は、まずいない。家を離れ、外国人相手の店番をしては、結婚相手となるような男性と仲良くなる機会がないのだ。

さらに奥地の 4350m にあるディンボチェのロッジに 10 歳くらいの少年がいた。あるいて 2・3 日かかるという村から口減らしで働きに出されていた。2・3 ヶ月に 1 度、休みを貰って父母や弟にいたる家に帰るといふ。「学校へは行ってない」と消え入りそうな声で答えた。それでも「がっぼがっぼとお金をもうけてカトマンズに家を建てたい」と夢を語ってくれた。

この子たちにどのような未来があるのかを考えたとき、暗澹たる気持ちとなる。マオイストは、軍隊や警察署を襲うという武装闘争、全土に広がるゼネストの乱発、勢力拡大のためスト破り者に対する暴力行為、マオイスト理論を支配下の村の学校に強制するなど、我々から見ると、どうも容認できないような過激な活動をする。活動資金を獲得するため、勝手に検問所を設け、通行税を取る。しかし領収書を見せれば、別の検問に引っかかっても二重に要求されることはなかった。しかし覆面をした黒服姿のマオイストは不気味である。

彼らは、拉致まがいの徴兵をしたりすることもあると言われているが、志願少年・少女兵も少な

くない。なぜマオイストが、貧しい農山村のほぼ全域を支配し、王制打倒の中心になるまで勢力を伸ばしたのかわかるような気がする。彼らの力抜きで、ネパールの王制打倒、民主化に踏み出せなかったであろうことは疑いようがない事実である。ネパールの現実の重さを痛感した。

3 民主化を完成させる力は「学ぶ」こと

(1)学校へ行ってなくても、おかみさんはバイリンガル

先に取り上げたランタン小学校より奥地にキャンジゴンパ(3800m)がある。この先には、定住部落は無い。ここのロッジのおかみさんは、英語、フランス語、日本語を話す。しかし「何歳ですか?」と聞くと「……」。隠しているわけではなく、戸籍とかそういうものがないので、正確な自分の年齢がわからない。無論、義務教育制ではないので、学校などへは通ったことがない。ロッジを経営しながら、お客から学んだ独学のバイリンガルである。日本から美しい花を見つけようとランタン地域の植物図鑑を持って行ったが、近所のおかみさん達とそれを見て、「これは食べられる、これは薬になる」、まさに実学である。高山病にやられた妻に、ニンニクを焼いて「絶対、効くから」と食べさせてくれた。

(2)女性会館完成



2005年にポカラからタトパニへ向かっていると、小さな村で大人から子どもまで、大勢が集まっていた。尋ねると女性会館が完成したので祝賀会をしているという。「あなたたちも参加したら」と誘われた。「今後の運営費にしたいから」と祝儀を求められたので、お祝いの気持ちを込めて、喜んでこれに応じた。このころにはネパールの女性差別についてかなり理解していたので、女性専用の会館ができるということは、女性達のたいへんながんばりと運動の前進があったことが伝わってきた。女性の実学の学びが、さらに村作り、国作りへと発展する、こういう学びの力がネパールの民主主義国家を作っていくであろう。

(3)女性の力が、ネパールの民主化には不可欠

第1次民主化闘争頓挫の原因、王政が廃止され第2次民主化時代に入りながら、なかなか進展しないのは、男中心で女性軽視のまま政治が動いているからではないかと考えられる。日本の政治も同様かもしれないが。

2006年、王制が廃止されると新憲法制定、和平の監視のために2つの委員会が設置された当初、暫定憲法草案作成にあたる6人の委員の中に女性はいなかった。31人の和平監視委員会中、女性委員はわずか2人であった。女性差別撤廃に取り組んできた女性たちは、市民革命の先頭に立

っていた主要7政党（seven party alliance : SPA）の本部を取り囲み抗議した。この運動が大きな力となり、その後、ヒンズー教君主国時代から残っていた数々の女性差別を撤廃する法案と女性を男性の下に置く法規制の見直しが満場一致で可決されたていった。

しかし法律で定められても、現実社会では建前に過ぎないことは前述のカースト制度の項でふれたとおりである。市民団体の指導者デベンドラ・ラジ・パンデイ師は「男性議員たちが『包含的民主主義』を語る気持ちに偽りはないが、今までの呪縛に縛られている。だからこそ、女性が委員に取り上げられないようなことが起きるのだ。政府は、女性を指名すべきだった」と語っている。弁護士マラ氏は「家父長的社会構造」に非があるとする。「これは男性だけでなく、女性にも深く根付いている。そしてマオイストは、社会文化構造に挑戦しているのだから、女性の扱いも違うだろうと期待したが、彼らにも家父長制は深く根ざしている」と語っている。

参考資料：INTER PRESS SERVICE JAPAN <http://ips-j.com/index.do>

たしかに王制打倒の中心であったマオイストの指導者は、抑圧された階級であるダリット（いわゆる不可触民）、原住民、女性のために、正義と平等を求めて闘うとしていた。しかし、政府との高官協議には、政府同様、交渉団に女性を入れなかった。

その後、さらに各地の女性活動家が首都カトマンズに集結し、政府に同一労働同一賃金を立法化するよう最高裁の命令を要求した。チトワンから参加した活動家のビシュヌ・マヤ・パンデ氏は「ネパール・タイムズ」紙の取材に応じ「私たちが求めるのは男性と同等の権利ではない。はなはだしい差別をやめさせたいだけ」と訴えた。

インターネット新聞 [janjan news](http://www.news.janjan.jp/world) 2006年7月8日 <http://www.news.janjan.jp/world>

おわりに

ネパールという国は、表面的には、ヒマラヤに代表される美しい国、細やかで素朴な田舎の国と見える。しかし、王政が廃止され民主国家への道を歩んでいるのは確かだが、政党間の権力闘争、法は建前だけで、現実生活は相変わらず封建時代の因習を引きずっている国でもある。

多くの国民は、政治に深い関心を持ち、激論を交わしている。私たちがアンナプルナ山中にいたとき、王政打倒の一斉蜂起が起きた。ラジオの周りにサーダーもポーターもみんな集まり、夜遅くまで激論が交わされていた。山から下りたとき、ゼネストとそれに対抗する王家の命令による外出禁止令で缶詰状態となった。ホテルの庭から、人っ子一人いない街を見ながら、私たちは、日本の政治・行政について評論はするが、これほど自分の生活と関わらせて、激論を交わしているであろうか、60年安保闘争のときの熱気はどこへ向かったのかなど考えていた。そのときの思いをこの小論をまとめながらあらためて思い起こしている。

最後に、本研究のため調査に協力いただいた本学園留学生 Patha Tabika、ガイドの Saroj Chitrakar 氏、幼稚園長の Dil Deui MulmiSaroj Chitrakar 氏に謝意を表します。

引用文献等

アジア読本「ネパール」石井溥編 p. 48 p. 49

「ECD、教育、教育政策、ネパール、ネパールの教育現状」<http://sobitakoiraia.blogspot.com/>

INTER PRESS SERVICE JAPAN <http://ips-j.com/index.do>

インターネット新聞 janjan news 2006年7月8日 <http://www.news.janjan.jp/world>

参考文献等

ネパール・ヒマラヤ探検記 日高信六郎 川喜多二郎 講談社 1967年

王国を揺るがした60日 小倉清子 亜紀書房 1999年

ネパール王政解体 小倉清子 NHKブックス 2007年

ネパールの働く子どもたち 編 Child Workers In Nepal Concerned Center 訳矢野好子

ネパールに生きる 八木澤高明 新泉社 2004年

ネパール紀行 三瓶清朝 明石書店 1997年

ネパール 清沢 洋 社会評論社 2008年

アジア読本 ネパール 石井溥 編 1997年

ネパールを知るための60章 日本ネパール協会 編 2000年

ネパールの山よ緑になれ 安倍泰夫 春秋社 2002年

少しの愛をほんの少しの夢をネパールの子どもたちへ 神崎孝行 幻冬舎 2010年

ヒマラヤの灯 宮原 巍 文藝春秋 1982年

ネパール奮闘記 村田誠吾 彩流社 2008年

夢に生きる 近藤 亮 講談社 2000年

もっと知りたい国 ネパール Bhattarai Nabin 心交社 2008年

留学生 Patha Tabika 調査「結婚と女性の地位(ジェンダー問題)」

(名古屋経営短期大学子ども学科 教授)